



中小企業がイ乎から始める 在宅勤務の障がい者雇用

在宅勤務と 障がい者雇用のこれから

株式会社カラフィス

代表取締役

三井 正義

- 第1回 コロナ禍だからこそ障がい者雇用の促進を
- 第2回 在宅障がい者雇用の基本的な考え方
- 第3回 在宅勤務者の業務内容とは？
- 第4回 採用はどのように進める？
- 第5回 毎日のマネジメントはどうする？
- 最終回 在宅勤務と障がい者雇用のこれから

ことし3月、法定雇用率が2・3%に引き上げられました。

障がい者雇用率は図表1のように就業中・失業中の障がい者を分子に常用労働者・失業者を分母にした計算から算出されますが、就業中つまり企業に雇用されている障がい者が増加していることに加え、失業者にカウントされる求職中の障がい者も、精神障がい者を

中心に大きく増えており、今後法定雇用率は上昇していくことが予想されます。

障がい者雇用に取り組む企業には、法定雇用率の上昇に加え「これまで雇用の中心であった身体障がい者の高齢化が進み、精神障がい者が雇用の中心となっている」「雇用義務企業が大都市圏に集中していることから、地域で格差が

生じている」といった問題から、新たな一手が求められており、地方の障がい者と大都市圏の企業をつなぐ在宅雇用は有効な一手となります。連載のなかで紹介してきた「採用」「マネジメント」「制度」なども参考にいただき、1社でも多くの企業が「障がい者の在宅雇用」に取り組むことになれば幸いです。

最終回の今回、在宅で雇用されている6名の障がい者を紹介します。「頭ではわかるけど、在宅の障がい者ってちょっとイメージできないな」と感じている人に少しでも身近に感じていただけたらと思います。

息子に働く姿を見せたい

青森県在住のAさん（40歳）が通勤中の車で事故を起こしたの、長男が2歳の誕生日を迎える1週間前。奥さんと「誕生日のケーキ、どうしようか」と相談した翌朝でした。

目が覚めたら頸椎損傷で下肢だけでなく四肢が思うように動かない状況。一時は「車いすを漕ぐのも無理」とまで言われましたが、

国立障害者リハビリセンターで1年以上の訓練を行ない、なんとか車いすで生活できるまでに回復しました。

以来12年、自宅での生活が続きしました。小さな子どもと過ごす時間の長い生活は、ある意味充実していましたが、ときが経つにつれて変化を見せ始めます。

思春期に入った子どもの言葉、「なんでうちの父さんは、働かないで家にいるの」。事故前は建設現場で重機のオペレーターをしていたAさん。「この体で働くのはあり得ない」と思い込んでいましたが、息子に働く姿を見せたいとハローワークに通い始めました。しかし、紹介されるのは意に沿

図表1 一般民間企業における雇用率設定基準

$$\begin{array}{c}
 \text{身体障害者、知的障害者および} \\
 \text{精神障害者である常用労働者の数} \\
 + \\
 \text{失業している身体障害者、} \\
 \text{知的障害者および精神障害者の数} \\
 \hline
 \text{常用労働者数} + \text{失業者数}
 \end{array}$$

障がい者雇用率

わない仕事ばかり。「障がい者ということで、こんなに選択肢が狭まってしまうのか」と改めて感じましたが、通い詰めた結果、ようやくたどり着いたのがいまの在宅での事務の仕事です。

事務作業に必須のPCスキルは、職業訓練校でワード、エクセルをかじった程度でしたが、オンラインでの社員の指導により、いまは派遣スタッフの登録業務で事業を支えています。

入社から3年、Aさんの誕生日に長男が「おやじ、変わったな」とふと漏らしました。

「まだ40歳、バリバリ頑張って会社に貢献していきたい」とAさんは語っています。

TV会議で対人恐怖症を乗り越え、新たな出会い

在宅勤務によって「人との関わりが怖い」という気持ちを克服し、生涯の伴侶を得たのが北海道在住のBさん（37歳）です。

Bさんは、統合失調症で、精神障害者2級の手帳を持ちます。大学卒業後、一般就職で造船会社に勤めましたが、被害妄想の傾向があり、落ち込むことが多く退職。

地元に戻り転職を繰り返し、就労支援施設にも通所しました。人との関わりが苦手となり「一時は、ファミレスで店員にオーダーの声をかけることもできなかった」と話します。そんなBさんが在宅の仕事をはじめたのは5年前。「自分の部屋で仕事ができる安心感」が志望動機でしたが、副産物としてあったのが「TV会議でのコミュニケーションの心地よさ」でした。

「それまでは人と会うと、相手に変に思われているんじゃないかと勝手に思い込んでいたが、TV会議でのやり取りでそんな考えが消え、対人での自信につながっていった」と言います。

担当のサイト情報の掲載前審査業務でも、安定した実績を残しています。

人との関わりの恐怖を乗り越えたBさんは動きます。札幌で開催された婚活パーティーに参加したのです。そこで出会ったのがいまの奥様。半年でプロポーズ、一度は「ちょっと待って」との返事でしたが、2年ほどでOKをもらい、昨年6月に結婚しました。

いまは、両親と2世帯住宅で暮らすBさん。在宅の仕事が終わったあと、夫婦での買い物や料理を

楽しんでいきます。

受傷後 夢のルート66へ

2019年11月、Cさん（57歳）はカリフォルニアのルート66にいました。どこまで続いているのかわからないほど長い貨物列車が、道路わきの線路を延々と走りまです。「これぞアメリカ」の実感が沸き上がりました。

大阪で二輪販売店を営むCさんが、自転車で近所のコンビニに買い物に行く途中、電柱へ衝突したのは8年前。

「普段は明るい道を行くがその日に限って暗い道を行った」。頭蓋骨3か所骨折、右目失明、首の脊髓損傷で四肢麻痺の障がいを負いました。

27歳で起業し、順風満帆で来たCさん。会社も売却し、家でくすぶる「どん底の気分」の日々となりました。

「このままいてもアリ地獄、頭は回っている、何とか家でできる仕事はないか」と4年前にたどり着いたのがいまの仕事です。

もともと「人は話すことで、プラスのエネルギーをもらい、与え

ることができると考えていたCさんにとって、1日3回のTV会議で会話を交わすいまの仕事は大きなエネルギーとなっています。

「発信することで元気が反射する。みんなで頑張ろうという気になる」と話し、顧客管理システムで企業名が重複している企業が、同一法人か別法人か精査する仕事に取り組み毎日です。

受傷前は車にスノーボード、ゴルフにキャンプと多趣味であったCさん。多くを失いましたが、「できる」と考えたのがルート66への旅です。

「不安はあったが、行けば何とかなるだろう、あとは気持ちだ」と出発しました。現地ではピックアップトラックをレンタル。車の運転は同行の奥さんが主に担当し



Cさん、念願のルート66で

ましたが、道が広い所では一部ハンドルを握ることもできました。「ルート66は、全長約4000キロ、今回走破したのはまだ3分の1。コロナが収まったらまた行きたい」と、Cさんは言います。

生活のリズムが安定し 特技を磨く

北海道在住のDさん(24歳)は、在宅勤務のかたわら特技を磨き、最近札幌の大型店舗で作品の委託販売を始めました。

発達障害の1つであるADHD(注意欠如多動症)で精神障害者3級の手帳を持つDさんが在宅勤務を始めたのは4年前。

以前は新卒で販売職に就いていましたが、接客だけでなく品出しや発注など様々な業務を同時にこなすことが苦手で、ミスも多くありました。その影響で人間関係もうまくいけなくなり、結局2年ほどで退職。

「失敗が怖いから人に見られていると何か間違っているのではという気持ちになり、考えながらやるとなおさらうまくいけなくなりました」。その後地元就労移行支援施設に通所するようになり、出

会ったのが在宅の仕事です。いまの業務は、情報誌の内容に規定違反がないか審査することですが、「在宅では人目を気にせず落ち着いて仕事ができる」と話します。勤務は、月曜から金曜日の9時30分から16時30分で残業や休日勤務は一切ありません。

生活のリズムが安定したため打ち込むことができるようになったのが、特技のアクセサリーづくりです。販売職のときは、休日も体を休めるために寝て過ごし、ほかのことをする余裕はなかったのですが、在宅勤務開始後は、時間を計画的に使うことができるようになりました。結果、ネットから始めた販売は、大型店舗での委託販売にまで拡大。

月末に店から届く販売情報を確認し、新たな作品を店頭へ届けることを楽しみにしています。

在宅勤務者同士で 新たな家庭を持つ

2019年11月に入籍した沖縄県在住のEさんとFさんは、同じ会社の在宅勤務者として出会いました。Eさんは、システムに入力された求人情報をきれいに完成さ

せる業務、Fさんは、全国の求人サイトに掲載している自社サイトが、どのように掲載されているか画面を見て調査する業務を担当しています。

ご主人のEさん(41歳)は35歳のときに、運転中に追突され脊髄を損傷しました。販売職を中心にキャリアを積んでいましたが、発信することが苦手で、自信もない性格のため顧客対応も苦戦していました。そんなEさんが4年前に在宅の仕事を始めることで変わりました。「2か月の導入研修中、毎日30分個別にアドバイスをもらって、少しずつ自信が持てるようになったんです」。

奥様のFさん(44歳)は骨形成不全症。保育園や福祉関係で働くことを目指していましたが、短大生のときの手術で歩くことが難しくなり、コールセンターへ就職し

ました。

ただ、障がい者がある種「平等」に扱う職場は、長く働くことが難しい職場でもあり、ハローワークから紹介を受けたいまの仕事に転職しました。

「在宅の仕事は1人で暗くなるのでは」との心配もありましたが、実際はまったく違っていました。「これまで、障がいがあることで、できないことが多い印象を持たれてたくなかった。質問もせずには死にやってきました。うまくできず、自信を失うことも多かった。でもいまの職場では何度聞いても対応してくれるので安心感がある」とFさんは話します。

Eさんも「できないことではななくできることを見てくれたので、自信がついた」と話します。2人は同僚を通じて知り合いました。Eさんは、当時佐賀県に住んでいましたが、仕事で培った発信力を活かして距離を超えて関係性を深めました。

昨年6月に予定していた挙式はコロナの影響で延期となってしまいましたが、新たな日取りも決まり、いまは在宅勤務をしながらその日に向けて楽しく準備する毎日を送っています。(了)



家庭を築いたEさん(左)とFさん

みつい まさよし (株)カライフ代表取締役。1986年(株)リクルート入社。2012年より同グループの特例子会社(株)リクルートオフィスサポート執行役員。2020年同社を退職し、障がい者の在宅雇用を推進する(株)カライフを創業(<https://www.coloffice.com/>)。